

多摩川の歴史

質問事項	回答
<p>多摩川という名前は、誰がつけたかわかりますか？</p>	<p>いろいろな説があります。例えば平安時代に出された「倭名類聚抄」には武蔵国府多磨郡という表記があり「多磨」を「タマ」ではなく「タバ」と読ませています。多磨郡に大丹波、小丹波という村があったという説、水源が甲州都留郡丹波山村にあったため「丹波川」と呼んだという説などがあります。いずれにしても誰がつけたかはわかりません。 (回答:国土交通省京浜河川事務所)</p>
<p>昔の人は多摩川のことをどう思っていたのでしょうか。</p>	<p>多摩川は江戸時代には、毎年のように洪水がやってきて、そのたびに川沿いでは多くの命が奪われたり田畑が流されたりして、人々のくらしは常におびやかされてきました。そのため堤防を築いたり、川の流れを変えたり、いろいろな洪水対策を行ってきています。中国では「水を制する者は国を治める」という言葉がありますが、水を治めることはとても重要なことであることは多摩川も同じと言えます。現在は川沿いに多くの人々が住み、多くの企業などがありますので、人命、財産を守るため更に安全な川づくりが望まれています。このように一度あばれると大きな被害を出していた川も、昔は山から切り出した木材を江戸へ運ぶ重要な運送路でした。多摩川の水質は和紙の生産に適しているため多摩川和唐紙が考案され江戸で使われていました。また、たくさんの酒造元が多摩川の湧水や地下水を利用し、お酒が造られてきました。もちろん農業用水として農産物の生産には、かかせないものでした。飲料水としての大きな役割は昔も今も変わっていません。このように川と人とのかかわりは切り離すことはできませんし、その中で、あるときは災害をもたらすものでありあるときは恵をもたらすものでした。昔の人は、このような多摩川をにくらしく思うこともあったでしょうが、感謝をしたときもあったのではないのでしょうか。 (回答:国土交通省京浜河川事務所)</p>
<p>多摩川は江戸時代(?)に水運が盛んであったということですが、具体的な情報はどこで調べることができますか？経路や船着き場の位置、運んでいた物の内容、等が知りたいのです。</p>	<p>多摩川の水運は大きく分けて荷物の運搬、渡船、いかだ流しの三種類があります。多摩川は、江戸市街地の南側に位置し、河口には大きな城下町などはありません。また、比較的流れが速いことが特徴です。このため、船による荷物の運搬は河口から中流の是政までの間に限られ、年貢米の津出し、近傍の農作物や肥料等の運搬に使われていました。一方、江戸に通じる東海道、甲州街道をはじめとする大きな街道が多摩川を横切っています。このため沿岸には多くの“渡し場”が設けられていました。さらに、上流には奥多摩の豊かな森林が広がります。このため、江戸市街地の木材需要を充たすため、山から切り出した材木を筏に組み、下流まで流す“いかだ流し”が盛んに行われていました。こららのことは、国土交通省京浜河川事務所発行の「多摩川誌」「新多摩川誌」に詳しく記載されています。 (回答:郷土史研究家長島保先生に相談し作成)</p>
<p>昔の多摩川の形が分かる地図はどこへ行ったら見ることができますか？昔の多摩川の形が分かる地図はどこへ行ったら見ることができますか？</p>	<p>昔の多摩川の形についてですが、江戸時代には全体的な地図は作成されておらず村ごとの切絵図や絵図でその時代の様子を知ることができます。絵図では「調布玉川惣絵図」(相沢伴主 著、長谷川雪堤 画 弘化2年1845年刊)が特によく知られています。これは「多摩川絵図—今昔—源流から河口まで」(今尾恵介 2001年(株)けやき出版発行)として復刻されていますのでお近くの図書館にお問い合わせください。また、明治14年(1881年)には日本で初めての近代的な測量地図が作成されます。この地図は正確には「第一軍管地方二万分の一迅速測図」と呼ばれ、近代的な治水事業が始まる前の江戸時代の姿を残した明治中期の多摩川の様子を詳しく知ることができます。またそれ以降、明治後期からは現在の国土地理院の地形図に連なる5万分の1、2万5千分の1の地図が作成されています。これらの地図については(財)日本地図センターにお問い合わせください。(http://www.jmc.or.jp/) (回答:郷土史研究家長島保先生に相談し作成)</p>

<p>昔の多摩川には砂利を運ぶための砂利船という物が川をわたっていたと聞いています。 砂利船について詳しく調べられる所はどこがありますか？教えてください。</p>	<p>多摩川の砂利採取は、江戸から東京へと替り、道路・鉄道或いは官庁街の建設など近代的な都市づくりが進む明治10年代後半から本格化します。それ以前の多摩川の砂利採取は細々としたものと考えられています。砂利採取は、下流の六郷など東京の中心市街地に近くまた、船で輸送できる場所から始まり、採掘船と運搬船を使用して行われていました。採掘船と運搬船で採取・運搬できる区間は下流に限られているため、採取の場所は下流から徐々に中流に向かって進み、輸送手段も鉄道が主流になります。多摩川沿岸の東京急行、京王鉄道、西武鉄道、或いはJR南武線などは当初、砂の運搬を目的に敷設されたものです。これらのことは、国土交通省京浜河川事務所発行の「多摩川誌」「新多摩川誌」に詳しく記載されています。また、下流の大田区のようなについては「大田区史・民俗」に平野順治さんが詳しくお書きになっていますのでご参照ください。</p> <p>(回答:郷土史研究家長島保先生に相談し作成)</p>
---	---